

高速戦艦「赤城」 3

レキシントン
巡洋戦艦急襲

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	未知なる銚先	9
第二章	盟邦の思惑	39
第三章	堅陣の島	63
第四章	硫黄島沖海戦	95
第五章	俊足の襲撃者	143
第六章	空母の守護神	205

硫黄島

沖ノ鳥島

マリアナ諸島

サイパン島

テニアン島

グアム島

太平洋

トラック環礁

内南洋要域図



サイパン島詳細図



0 2 4 km



高速戦艦「赤城」 3

レキシントン
巡洋戦艦急襲

第一章 未知なる銚先

1

南太平洋の真つ青な海面が、潜望鏡の狭い視界に入つて来た。

波は高めた。風に碎かれる波頭が陽光を反射し、宙に舞う様が見える。

呂号第三三潜水艦長坂本栄一少佐は潜望鏡を一旦下げ、右に六〇度回転させた。

再び潜望鏡を上げ、海上の様子をうかがつた。

「対潜艦艇の姿なし、か」

坂本は潜望鏡を下ろした。

艦の現在位置は、トラック環礁の南東だ。

環礁に複数ある水道のうち、南端の小田島水道から五〇哩の距離を隔てている。

時刻は一五時二七分（現地時間一六時二七分）。太陽は西に大きく傾いているが、海上はまだ明るい。

環礁の周囲、特に水道付近では、駆逐艦を始めと

する対潜艦艇が目を光らせているが、現海面にはいないようだ。

「推進機音、右六〇度。音源多数」

一六時四一分、水測長樺島元男二等兵曹の報告が、発令所に上げられた。

「機関停止。無音」

坂本は、機関長真田恵大尉に命じた。

呂三三は潜望鏡深度を保つたまま、その場に停止した。

水測室から「右五五度」「右五〇度。音量増大中」と、変化が報告される。

「推進機音、右四五度」の報告を受けたところで、坂本は潜望鏡を上げた。

「あれか」

との眩きを漏らした。

水平線付近に、複数の小さな影が見える。

潜望鏡の上げ下ろしを繰り返す度、新たな影が増えて行く。

米軍の輸送船団ゆうそうせんだんに間違いない。トラック環礁の米太平洋艦隊に、補給物資を運んで来たのだろう。

「水雷、魚雷発射準備。発射雷数四」

坂本は潜望鏡を下ろし、水雷長小牧章大尉こまきあきらに命じた。

「敵の船団ですか？」

「間違いない。まっすぐトラックを目指している」

「現在位置から見て、船団は小田島水道を目指していると推測されます」

航海長諸橋智則大尉もろはしとものりが意見を述べた。

小田島水道は幅が約七〇〇メートルと広いが、水道内部に深さ一〇メートル以下の点礁てんしょうがあるため、大型艦の通行には適していない。

日本海軍も、トラックが陥落かんらくする前はこの水道を使用せず、環礁北部の北水道きたすいどうを使っていた。

だが米軍は、今年——昭和一七年の年明け早々より、小田島水道の利用を開始している。

友軍の潜水艦が探ったところでは、積み荷を満載

し、喫水きつすいを大きく沈めた輸送船も、何事もなく通過していたという。

おそらく米軍は、小田島水道が大型艦の通行に適するよう、水道内の点礁を破壊したのだ。

「米軍は補給船の航路変更に合わせて、環礁に出入りする水道も変更したのだろう」

呂三三が所属する第四潜水戦隊の司令部は、そのように睨にらんでいる。

昨年一月より、連合艦隊は陸上攻撃機と潜水艦によって、トラックに向かう米軍の輸送船団を繰り返し攻撃した。

補給線を切断することで、同地の米太平洋艦隊に足止めを食わせると共に、トラックの基地化を妨害ぼうがいしたのだ。

この戦術は、最初のうちは効果を發揮した。

米太平洋艦隊がトラックで足踏あしがみしている間に、米アジア艦隊はフィリピンから脱出し、フィリピンの米極東陸軍は日本軍に降伏こうふくした。

開戦以来、最大の懸案事項だった南方資源地帯と日本本土を結ぶ南シナ海航路が開かれ、日本は戦略物資の入手が可能となったのだ。

フィリピンの陥落後も、連合艦隊はトラックへの補給線攻撃を継続したが、昭和一七年の年明け頃から、戦果が減少し始めた。

米軍の輸送船団は、南に大きく迂回する航路を採るようになったため、陸上攻撃機も潜水艦も、船団の捕捉に失敗することが多くなつたのだ。

(いづれトラックを奪い返したら、小田島水道は我が軍が使つてやるさ)

坂本は胸中で、米軍に呼びかけた。

船団の動きに変化はなく、呂三三に護衛艦艇が向かつて来る様子もない。

敵は、海面下に潜む敵に気づいていないようだ。

(この型の長所だな)

坂本は声を立てずに笑つた。

呂三三は、「海中六型」と呼ばれる中型潜水艦の

一艦だ。航洋型である伊号よりも小さく、航続距離も短い。が、隠密性では優れている。

元々は、伊号の補助的な役割を務めるために建造された型だが、海軍の戦術思想の変遷に伴い、伊号よりも呂号が多数建造されるようになった。

海中六型は、呂三三、三四の二隻が建造されただけだったが、現在はより性能が向上した「中型」が次々と竣工し、前線に配備されている。

呂三三が発見されずに済んでいるのは、艦体の小ささ故であろう。

「推進機音、右四〇度」

「推進機音、右三五度」

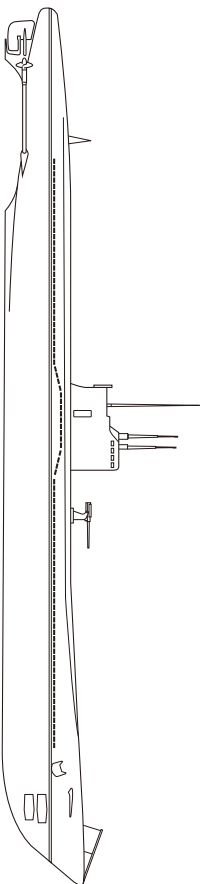
樺島は、こまめに報告を送つて来る。

「右三〇度」の報告が上げられたところで、坂本は潜望鏡を上げた。

潜望鏡を覗き込むや、ぎらつく反射光が坂本目の射た。

「しめた」

日本海軍 潜水艦「呂号第三三潜水艦」



全長	73.0m
最大幅	6.7m
基準排水量	水上 700トン / 水中 1,200トン
主機	艦本式ディーゼル / 電動機 各2基 / 2軸
出力	水上 3,000馬力 / 水中 1,200馬力
速力	水上 18.9ノット / 水中 8.2ノット
兵装	8cm 40口径 高角砲 1門 53cm 魚雷発射管 4門 13mm 機銃 1丁
乗員数	61名
同型艦	呂号第三四潜水艦

ニューヨーク海軍軍縮条約の結果、航空主兵主義を選択した日本海軍は、潜水艦戦力についても方針を転換した。従来は太平洋をわたって来寇する敵艦隊を邀撃するための大型潜水艦（伊号）を中心とした戦備だったものを、航続力は劣るものの隠密性が高く、生産にかかる日数も少ない中型潜水艦（呂号）を多数建造するよう計画を変更した。

本艦は、戦時急造型として試作される「海中六型」の1番艦で、新たに開発された艦本式ディーゼル機関を採用し、水上速力19ノットを得ている。操縦性、凌波性も良好で、乗員の評価も高い。同型艦は呂号第三四潜水艦のみだが、さらに改良された「中型」が各地の造船所で建造され、すでに前線への配備が進んでいる。

敵地の偵察や哨戒のほか、通商破壊や補給線の遮断など、あらゆる任務で活躍する優秀な潜水艦である。

坂本は小さく笑った。

太陽が水平線に近づいたため、陽光は船団の斜め横から差し込む形になっているのだ。

潜望鏡は陽光に隠れる形になっており、艦上からの視認は難しい。

坂本はすぐには潜望鏡を下ろさず、船団の様子を観察した。

船は、ざっと見ただけでも三〇隻前後。どの船も、喫水を大きく沈めており、動きが鈍い。

輸送船の手前には、駆逐艦とおぼしき小型艦艇が見える。

「距離三〇〇〇メートル」か

坂本は、潜望鏡を下ろして呟いた。

「微速前進」

「面舵二〇度」

「水雷。雷撃目標、右三〇度、三〇の敵輸送船団」
坂本は断を下した。

必中を期すには、もう少し距離を詰めたいとこ

ろだが、敵に接近すれば、発見される確率も高くなる。

少し遠いが、現在位置から雷撃を敢行するのだ。

呂三三が、ゆっくりと前進を開始する。

「面舵二〇度！」

諸橋が下令し、艦首が右に振られる。

艦が直進に戻ったところで、坂本は「停止」を下令し、潜望鏡を上げた。

船団は右前方に見えるが、間もなく呂三三の射線上に入ってくる。

「敵距離二八〇〇メートル」。雷速四九ノット。

開口角二度。駛走深度五」

「敵距離二八。雷速四九ノット。開口角二度。駛走深度五。一分後に発射始めます。まず一番、二番を

発射。続いて三番、四番を発射します」

「一分後に発射始め。了解」

小牧の報告を受け、坂本は一旦潜望鏡を下ろした。艦長付の野沢六郎一等水兵がストップウォッチで

時間を計測し、「二〇秒経過」「二〇秒経過」と報告する。

三〇秒が経過したところで、坂本は潜望鏡を上げ、敵との相対位置を確認した。

艦影の大きさに、変化はほとんど見られない。

船団の速力は六ノット程度であり、一〇秒や二〇秒では、距離はさほど縮まらない。

それでも、敵船が呂三三の射線上に近づいていることは紛れもない事実だ。

「発射用意よし」

艦首の発射管室から報告が届いた。

「発射管注水。前扉開け」

「発射管注水。前扉開きます」

復唱の声に、野沢一水の「一分経過」の報告が重なった。

「よし、発射！」

腹の底から力を込め、坂本が下令したとき、潜望鏡の視界の中を、銀色に輝くものがよぎった。

(いかん……！)

坂本が背筋に冷たいものを感じたとき、呂三三は艦体を僅かに震わせた。

四門の発射管から二本ずつ、時間差を置いて、四本の魚雷が放たれたのだ。

「急速潜航！」

「海面に着水音。近い！」

坂本の命令に、樺島の報告が重なった。

注水音が聞こえ始めたとき、艦全体を何かに叩き付けるような衝撃が襲いかかった。

艦腹が引き裂かれ、奔入して来た海水が、坂本以下六一名の乗員を呑み込んだ。

二分余りが経過したとき、炸裂音が伝わって来た。

呂三三が放った魚雷が、輸送船の水線下を食い破った音だ。

命中魚雷は一本だけだったが、輸送船は船倉一杯に積み込んだ航空機の修理用部品の重みによって、急速に海面下へと引き込まれつつある。

轟沈こうせんと言つてもよかつたが、呂三三の乗員には、もはや戦果を確認することはかなわなかつた。

トラック環礁に空襲警報が鳴り響いたのは、現地時間の一八時四〇分だった。

「来やがつたか、ジャップめ！」

駆逐艦「リヴァモア」の二番両用砲で、砲台長を務めるステイーブ・ファアガスン兵曹長は、罵声ばせいを放つた。

「リヴァモア」は、合衆国の駆逐艦の中では最も新しいリヴァモア級の一番艦だ。

第三駆逐艦戦隊D^DF³に所属する第一四駆逐隊D^DG¹⁴の一艦としてアジア艦隊に所属していたが、同艦隊がフィリピンから撤退てつたいした後は、補給物資を運ぶ輸送船団の護衛任務に就ついている。

この日——一九四二年二月二七日は、僚艦りょうかんと共に輸送船三八隻で編成されたKT89船団を真珠湾しんじゅわんか

らトラックまで護衛した。

トラックの手前で潜水艦の襲撃を受け、輸送船一隻を沈められたものの、他に被害はなく、船団は日没間際まぎわに、環礁南端のS1水道チンネルからトラックに入泊した。

現在は、各船がモエン島（日本名『春島』）、デユブロン島（日本名『夏島』）、エテン島（日本名『竹島』）等、各々の目的地へと向かつている。

「リヴァモア」はDDG14の僚艦三隻、艦船用の重油を運んで来た油槽船二隻と共に、デユブロン島の東側に位置する「デユブロン錨地びょうち」に移動していたが、そのさなかに敵機が来襲したのだ。

「リヴァモア」の艦上に、警報アラームの音が鳴り響いた。「対空戦闘。配置に就け！」

艦内放送のスピーカーから艦長ヴァーノン・ヒューバー中佐の命令が流れ、甲板上にいた乗員は、弾はじかれたように走り出した。

ファアガスンは、射手のダンカン・ラミレス一等

兵曹や旋回手のモーリス・オサリバン二等兵曹らと共に、二番両用砲に取り付く。

デュブロン島では、灯火が次々と消されている。

飛行場や港湾施設が、灯火管制下に入ったのだ。

「砲術長より各員。敵機の現在位置、モエン島よりの方位一〇度、八〇浬。機種は一式陸攻か九六陸攻と推定される。トラック到達の予想時刻は一九時一〇分から三〇分の間。予想される侵入高度は一万フイートから一万五〇〇フイート」

射撃指揮所の砲術長フィリップ・サイモンセン大尉より、細かい情報が送られた。

モエン島に設置されたレーダー・サイトからの情報であろう。

「 Сайパンかテニアンのジャップだな」

ファーガスンは、敵の策源地を推測した。

日本軍は、船団が迂回航路を取り、航空機による捕捉が難しくなったため、入泊後の船団を狙って来たのだ。

日没後に来襲したのは、戦闘機による迎撃を避けるために違いない。

「敵編隊、環礁上空に侵入。高度二万二〇〇フイート」

「全両用砲、射撃準備。目標、本艦よりの方位五度、高度二万二〇〇フイート！」

一九時一〇分、ヒューバー艦長より情報が伝えられ、次いでサイモンセン砲術長からの命令が届いた。

「二番両用砲、射撃準備。本艦よりの方位五度、高度二万二〇〇フイート！」

「方位五度に旋回します」

「砲身、最大仰角！」

ファーガスンの命令を受け、オサリバンと俯仰手のジェフ・リーランド二等兵曹が応えた。

艦は方位九〇度、すなわち真東を向いているから、両用砲はほぼ左正横に向けられる形だ。

内径一二・七センチの砲身が、蛇が鎌首を持ち上げるように大仰角をかけられ、夜空を睨む。

前部に位置する一番砲も、後部に位置する三、四、五番砲も、最大仰角をかけたはずだ。

DDG14の僚艦も、他の艦艇も同様であろう。

四分ほどが経過したとき、遠雷のような砲声が届いた。

数秒の時を経て、モエン島がある方角から炸裂音が伝わった。

島の対空砲陣地が、射撃を開始したのだ。

砲声と炸裂音が連続する。あたかも、太鼓を乱打しているようだ。

「砲術長より各員。敵機は一七〇度に変針した。デユブロン錨地に来る可能性大！」

サイモンセンが、緊張した声で情報を伝えた。

(地上の発射炎を見て当たりを付けたか?)

そんな想像が、ファーガソンの脳裏をかすめた。

トラックの在泊艦船や地上の軍事施設は灯火管制下にあり、上空からの視認は難しい。

だが、対空砲の発射炎を見れば、モエン島やデユ

ブロン島、その周辺に位置する艦隊錨地の位置は、ある程度分かる。

自分の想像通りなら、モエン島の対空砲陣地は、発射炎によって敵機を誘導したことになる。

一旦終息した砲声が、再び轟き始めた。

音源は、モエン島の手前だ。

DDG14よりも北に布陣する第一五駆逐隊が、一足先に射撃を開始したのだ。

砲声と共に、爆音も近づいて来る。多数の双発機が、頭上に迫る音だ。

「リヴァモア」の二番両用砲は、微妙に旋回し、砲身の仰角を修正している。射撃指揮所から送られて来る諸元に基づく射角の微調整だ。

ファーガソンは、照準器を覗き込む。

視界のほとんどを占める無数の星々の中を、複数の黒い影がよぎる。

「全両用砲、射撃開始！」

「オーケイ、撃て！」

サイモンセンの命令を受け、ファーガスンはラミレスに命じた。

一 拍置いて足下に落雷するような砲声が轟き、砲塔全体が震えた。

一二・七センチ両用砲は、艦載砲の中では小口径だが、間近で発射したときの砲声と反動は、決して小さなものではない。砲塔内の要員には、全身を打ちのめされるような衝撃が襲って来る。

「リヴァモア」は四秒置きに、第二射、第三射、第四射と砲撃を繰り返す。

発射の度、強烈な砲声が耳を貫き、発射の反動が肉体を震わせる。排出された薬莖が上甲板に落下する鈍い音が、砲塔の脇から伝わる。

砲撃を連続しているのは「リヴァモア」だけではない。僚艦三隻も、先に砲撃を開始したDDG15の四隻も、一隻当たり五門の一二・七センチ両用砲を一万二〇〇〇フィート上空に向けて撃っている。

「敵機撃墜！」の報告はないが、ファーガスン以下

の砲員は、砲の一部となったかのように砲撃を繰り返していた。

爆音が左舷側から迫り、「リヴァモア」の頭上を通過した。

砲声と炸裂音、敵機の爆音に混ざり、鋭い音が聞こえ始めた。

(来る！)

ファーガスンは直感した。

数秒後、「リヴァモア」の周囲で、一斉に爆発が起こった。

砲塔内から直接目視はできなかつたが、飛び散る海水が甲板上に降り注ぎ、爆風が艦を揺さぶることだけははっきり感じ取れた。

敵機が投下した爆弾が、いちどきにデュブロン錨地に落下したのだ。

爆撃の第二波が襲い、再び「リヴァモア」を囲むようにして爆発が起こる。

基準排水量一六七〇トンの鋼鉄製の艦体が、爆風

を浴びて揺れ動く。

敵弾の炸裂に翻弄ほんろうされているのは、「リヴァモア」だけではないと思われるが、他艦を思いやっている余裕はない。

ファーガスン以下の砲員は、動揺する艦上で射撃を続けるだけだ。

爆音が右舷側へと抜けた直後、

「射撃中止！」

の命令が届いた。

四秒置きに轟いていた砲声と発射に伴う衝撃が収まった。

爆音は遠ざかりつつある。

デュブロン錨地への夜間爆撃が終わったのだ。

「砲術長より各員。どうやら切り抜けたぞ」

サイモンセンが伝えて来た。

声に、喘ぐあえような響きがある。夜間に対空戦闘の指揮を執るのは、かなりの難事かんじだったようだ。

「二番砲台長より砲術長。被害はありませんか？」

「『グレイソン』と『モンセン』が一発ずつ喰らった。現在、消火作業中だ」

ファーガスンの問いに、サイモンセンは返答した。

「リヴァモア」の姉妹艦だ。DDG 15に属している。

「油槽船は無事でしたか？」

「無事だ。至近弾二発を喰らったが、損傷はない」

サイモンセンの答を聞いて、ファーガスンは満足感を覚えた。

「リヴァモア」を含むDDG 14はDDG 15と共に、護衛の任務を果たしたのだ。

サイモンセンが、改まった口調くちようで言った。

「司令からの指示だ。今しばらく、警戒を続ける。

空襲の第二波、第三波が来ないとも限らないからな」

2

指揮所の脇に立つ飛行長が、大きく旗はたを振った。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。